

※無断転載はお断りいたします。

『私のお姫様』

作 あねとあなた

とある国のお姫様は病気でした。だから手術をしました。手術は成功しましたが、お姫様は泣いてばかりです。何日も何日も笑いません。

お姫様の友達の火の精と雪の精、そして、土の精がお見舞いに来ました。

「お姫様、どうしたの？」

と話しかけます。お姫様は、

「胸に跡が残るの、王子様と結婚出来なくなっちゃう。」

と泣いてばかりです。そこで、火の精は、熱い紅茶を入れ、雪の精は、氷の花束を作り、お姫様にプレゼントしました。一方、土の精は、なにも出来ませんでした。火の精と雪の精は、

「土の精、お見舞いをあげないなんて失礼よ。」

と責めました。土の精は、

「だって、私はお姫様の喜ぶ贈り物を持って来てなかったんだもの。だから私、お姫様の喜ぶ物を探しに行くわ。」

土の精は、花々の種を咲かせる妖精です。でも、姫自身に花を咲かせた方がいいと思いました。でも、土の精には傷跡を消す事はできません。だから、お城の外に出て、魔女に会いにいきました。暗い森を歩くと、光る家を見つけました。魔女の家でした。土の精は訳を話しました。魔女は、土の精の話聞いて、ある物をくれました。

「土の精、出来る事は一人一人違うのよ。」

土の精は分からなかったけど、贈り物が出来たので、城へ帰りました。

お姫様の部屋から、火の精と雪の精が出てきました。

「お姫様今日も泣いてたわ。」

火の精が言いました。雪の精も、

「今日も笑わなかったわ。」

土の精が、

「魔女に元気になる贈り物を貰ったから大丈夫よ。」

と言いました。火の精と雪の精も喜びました。姫の部屋に入ると

「お姫様、元気になる贈り物です。」と箱を開けました。

すると、絵の具と筆が入っていました。その時、“え、私が描くの？”と土の精は思いました。でも、毎日花を咲かせてきた私ならと、

「お姫様、この絵の具と筆で胸元に花を咲かせましょう。」

と言いました。姫は小さな声で、

「胸に花？」

土の精は言いました、

「肌にきれいな花を咲かせましょう。アクセサリーいらずのきれいな花を！」

姫は胸元の傷を見せました。小指程の小さな傷です。その傷を茎に見立て、姫の瞳と同じ青いバラを描きました。土の精がバラを描く時、

「ありがとう。でも、王子様は、傷のある私を嫌いにならないかしら。」

と言います。

「お姫様は、妖精の私たちにいつも優しくしてくれる。」

「そんな王子様もお姫様が好きです。」

と自信を持って答えました。姫はほこりをかぶった鏡を拭いて

「きれいな青いバラ。」

…涙が止まりました。そして笑いました。

「傷を受け入れるわ。私の体の一部だもの。」

と言って胸元を開けたドレスを着ました。そう、今夜は姫の快気祝いのパーティーがあるのです。

陽が落ちて、王子様が訪ねてきました。

「姫、病気回復おめでとう。」

王子は笑顔で言ってくれました。火の精は暖かなドレスを、雪の精は雪のように白いアクセサリーを、土の精は花で城中を彩りました。

「王子様、胸に傷が残ってしまったの。」

と告げました。

「私は、傷があっても姫が好きですよ。」

と言い、

「傷がなかったら、姫に会うことはできなかった。傷があるから、仲良しでいられるんじゃないですか？」

すると、抱き寄せてくれました。お姫様は暖かな涙を流しました。

胸元のバラは凜と咲き誇っていました。